

道徳性の芽生え (葛藤も含む)

成長発達にとっての意味

「道徳性の発達、他者や社会と調和した形で自分の個性を発揮することである」と言われています。この道徳性は生まれながらに身につけているわけではありませんが、他の人に合わせようしたり、他の人と基本的な信頼関係を求めようしたりする欲求はもっています。乳児は早くから泣いたり笑ったりして、快・不快の感情を養育者に伝えたり、養育者の動きに合わせて対応することができ、そのやりとりを通して徐々に、一緒に生活をしていく感覚をもち、生活のリズムを身につけていくと思われま。このように乳児期では子どもを保護し欲求への充足が中心だった養育者のかかわりが、身体的・情緒的な発達に合わせて変化してきます。いわゆる「しつけ」が始まることとなります。しつけははじめは危険な行動の抑制と生活習慣を身につけさせることなど、個人の生活に関することが中心ですが、子どもの生活の広がりとともに他の人との生活に関することも増えていきます。

幼児期になると、養育者を始めとする身近な人々の言動から学んだことを手がかりに、自分なりに考えて行動するようになりますが、不確かなこともあり、周囲の大人の応答に頼ることも多々あります。

幼児期は他律から自律に向かう大切な時期で、大人の対応から判断の基準を学んでいきます。特に幼児が何をやったのか、そのことの何がよくて何はよくないのかを考えられるような情報を提供することが大切ですが、大人からの働きかけを受け入れるには、信頼関係が基盤です。

5歳児には「他者の思いに気づく、他者と折り合わせていくこと」は遊びや生活の中で体験を通して育てていきたい重要なことです。他の人とともに心地よく生活しようとする意識や態度をはぐくむことが大切です。また幼児期には、あわせて規範意識の芽生えも培いたいものです。

子どもの姿 ① 「エイジくん 命令ばかりでずるいよ」 (5歳児)

6月のある日のこと。「カエルのえさをとってこい」とエイジがシュンタやトモヤに命令的な口調で言いました。シュンタは「エー、生きている虫を捕まえるのは難しいよ」と不満に言いながらも園庭に探しに行きました。トモヤは「無理だよ、カエルを飼うのは、生きているえさがなければ死んでしまうよ」と言い残して、ドッジボールをしに行っていました。一人でカエルをかかえているところにシュンタが戻ってきて「やっぱり見つからないよ。エイジくん、命令ばかりでずるいよ。自分も探したら」と言い、ドッジボールをしに行きました。エイジが「いいよ、一人で探すから…」と靴箱の前でうつむいているところに担任が来ました。担任が「エイジくん、カエル飼いたいんだ」と言うと「うん」とうなずき「みんななくなっちゃった」と寂しそうにしています。担任が「自分でえさを探したの」と聞くと、黙って首を振るだけです。さらに担任が「そうか、友達はどうしていなくなったのかな」と言いましたが、黙ってうつむいているだけでした。

担任は、友達に命令して遊びを進めることの多いエイジに、命令されるのはいやだという友達の気持ちに気づいてほしいことやカエルの立場も考えてほしいと思いました。エイジが自分で気持ちの整理ができるようにという願いをもってしばらくそばに寄り添っていました。その日は、絶対に飼うんだと言い張っていたエイジでしたが、翌日「カエル、逃がす」とぼつんと言い、園庭の隅の方に行きました。



子どもの姿 ② 「タケルくん 腕をこうやって早く振るといいよ」 (5歳児)

ヨウジは発想やイメージが豊かで一緒に遊ぶとおもしろいので友達が集まってきていましたが、自分の思うように動かしたい思いが強いので、次第に別の遊びをする子が多くなっていきました。

2学期も半ばになると、友達が「ずるいよ。ヨウジくんばかりいい役で」と言い返すようになってきました。そう言われるとヨウジは「いやなら出ていけよ」と強気でしたが、一人ぼっちになることも多くなり自分なりに葛藤しているようでした。

運動会も間近のある日のことでした。走るのが遅いタ

ケルがリレーの練習をしているのを見てヨウジが「タケルくん、腕をこうやって早く振るといいよ」と声をかけました。そして、タケルと一緒に走りだしました。「そうそう、足もいっぱい動かして」と言うとタケルの顔が笑顔になり、ヨウジもうれしそうでした。グループ対抗のリレーが始まると、ヨウジは他のグループにいるタケルに「タケルくん、がんばって」と大きな声で応援しています。同じグループの友達と声をそろえて応援していました。

*指導及び援助のポイント

子どもは自分で考えて行動することも多くなりますが、「大人に言われたから」「怒られるから」など信頼する大人の言うことを正しいと考え、それに従う傾向が強くなります。このような経験を繰り返しながら、自分としての考えや行動が明確になっていきます。つまり他の人からのアドバイスを素直に受け、自分としての考えや判断につなげ、広がりのあるものにしていくことが望まれます。

6歳を過ぎるころから、次第にそれまで身につけた道徳的判断力や行動力を基に他律から自律に向かっていきます。このときでもしばらくは、大人との関係で確認をしながら自信を深めていきます。

道徳性が育っていくのには時間がかかります。

知得

幼児の道徳的な判断や行動の基準およびその定着は、周囲の大人にかかっています。特に大人の言動そのものや、幼児が判断し行動したことへの受け止めや応答が大きなかわりをもたらします。

子どもとゆっくりと向き合い、一人ひとりの子どもの理解の仕方や行動の仕方のペースに合わせる事が大切です。

家庭ではまず、生まれたときからの家族とのかかわり、大切にしてきたことの見直し、そして何よりもわが子の成長を見つめ、これから先、わが子に育ててほしいこと、育てたいことを明らかにすることも必要でしょう。基本的には家庭ではぐくまれた道徳性が基盤になります。

保育所や幼稚園などの集団施設での指導や援助にあたっては、一人ひとりの子どもが他の人との信頼関係をどのように構築しているかがポイントになります。家庭とは異なり、大人である保育者と同じ年齢の子どもたちがともに生活する場ですから、今までに出合わなかった場面に遭遇します。思うようにならない体験、いやな思い、つらい思いなど、いい思いばかりではない場に出会い、葛藤もします。このような思いの体験は、自尊と他尊、自他の認識、自己抑制や思いやりの気持ちなどをはぐくみます。このためには先生という信頼できる人の存在と友達という仲間の存在が何より大切になります。

道徳性の芽生えを培うのは、自分のしたことに応答してくれる人(友達)の存在などとともに子どもを取り巻く身近な人の生き方や生活の仕方、価値観などと言ってもよいでしょう。

仲間関係

成長発達にとっての意味

2歳前後でも自分と同じような子がそばにいて、手を伸ばして触ろうとしますが、まだ友達とか仲間という気持ちはなく、単なる興味からの行動と考えられます。3歳を過ぎるころから相手を求める様子は見られますが、一緒に遊ぶというよりは同じような誰かがいるところで、自分の好きなことをするという状況が多いようです。

4歳児になると3人くらいならともに遊ぶことができるようになります。特に同じものを身に付けた持ちたりすることで、「仲間」という気持ちを感じるようです。次第にイメージを共有することが増えたり遊びのテーマがはっきりしたりしてくると、「同じ遊びをする仲間」という思いが強くなります。このころになると、「入れて」と言っても「だめよ」と断ることもあり、悲しい思い、寂しい思い、いやな思いなどを体験することもあります。自我を形成していくうえで、自分とは異なる人の存在を感じさせてくれる仲間とのかわりとはとても大切です。仲間とは、一緒に物事をする人という意味ですから、同じテーマやイメージで遊ぶようになる4歳児の後半になってから、「仲間」と思えるようになるのではないのでしょうか。しかし、幼児の気持ちはまだ揺れ動いているころですから、仲間関係は強いものではなく、その場の条件に左右され、関係はゆるく流動的です。

5歳児になって、グループで共通の課題に取り組んだり遊びの中で互いの存在が認め合えたりするよ

うになると、仲間関係が深まってきます。このころになると、一緒に遊ぶ人数も多くなり、ドッジボールやサッカーなどチームに別れて勝敗を競う遊びが盛んになります。これらの遊びでは「勝ちたい」という共通のめあてが明確になり、一人ひとりが自分がどうすればチームのためによいのかを意識したり仲間の動きも見えたりするようになります。そうすると力を合わせたり、仲間の動きに合わせた動きができるようになり、気持ちのつながりも感じられるようになってきます。この、互いに「仲間だな!」という感情は子どもたちを大人の世界に一步踏み込んだような気分にするようです。しかし幼児期では、パーソナリティに基づく人間関係には至らず、その場その場の状況に応じた、どちらかというところ、自分にとってよいというところでの仲間関係に止まっています。

子どもたちは仲間関係の中で、「友達っていいな」とか「仲間がいるって心強いな」という体験を多くしますが、反対に「仲間はずれ」という状況にも出会います。自分の思い通りにならない体験を通して、仲間と一緒に遊びや生活をしていくために相手の気持ちを考えながら折り合いをつける知恵をつけていきます。この「仲間はずれ」をどう知恵を働かせ、互いに折り合いをつけながら乗り越えるかが大きな成長につながります。この両方の体験の積み重ねが相手を尊重し、相手を理解することにつながっていくものと考えます。

子どもの姿 ①

「おんなじ! おんなじ!」 (3歳児)

入園して3ヶ月、3歳児のツヨシ、カナ、ヨウコは自分の好きな遊具を持って砂場に行き、砂を盛ったりごちそうを作ったりしています。そのうち、ヨウコがカナの皿を見て「あ、おんなじだねえ」とうれしそうに言います。カナが「ほんとだ! おんなじ」というと、すぐそばにいたツヨシも自分の皿を見て「ほくもおんなじ、ほら!」と言って二人に皿を見せます。三人は「ほんと、おんなじ」「おんなじ! おんなじ!」と繰り返しながらいつまでも繰り返して、笑い合っていました。



子どもの姿 ②

「本当は一緒に遊びたかったのかな?」 (4歳児)

4歳児のタツヤとカツアキが中型積み木を並べて遊んでいます。それをじっとケンイチが見ています。突然ケンイチが並べてある積み木を一つ取るとその場から駆け去ります。タツヤとカツアキは「それ、ぼくたちの。返して」と追いかけていきます。するとケンイチは、黙って持っていた積み木をポイッと返してよこしました。カツアキは積み木を拾い上げると、タツヤは「もう! ケンイチなんかきらい!」と言い、二人は自分たちの場に戻って

いきました。その様子を見ていた担任は「ケンくん、本当は一緒に遊びたかったのかな?」と聞いてみました。ケンイチは少し間をおいてから小さい声で「うん」と言ったので担任は「そういうときは入れてとか、一緒に遊びたいって言えばいいのよ。一緒に言いにいく?」と言うと、「うん」とうなずいたので一緒にタツヤたちのところに行きました。

子どもの姿 ③

「おれたち仲間だろ、だから…」 (5歳児)

5歳児のヤスシはイメージが豊かで発想がおもしろいこともあって、ケイタとシンヤと一緒に遊びたい気持ちでいますが、ヤスシは、その二人は自分の思うように動いてくれる相手と思っているようです。

6月のある日、ヤスシは園庭の隅で中くらいのカエルを見つけ、どうしても飼いたいと思って担任のところへ相談に行きました。担任がカエルははえや虫などの生きたえさしか食べないことや生きたえさを呼び寄せる装置が保育園にはないので、飼うのは困難であることを伝えますが、どうしても飼いたいと言い、えさ探しに意欲を燃やします。しばらく園庭をまわって虫を捕まえようと思いましたが、なかなかカエルのえさになるものは捕まえません。ヤスシはケイタとシンヤを呼びに行き、カエルを見せながら「おれ、このカエル飼いたいんだ。ねえ、おれたち仲間だよな。だから、えさ捕まえてきて!」と二人に言い、返事を待たずにカエルの方を見えています。二人は「えっ」という顔で見合っていました。「無理だよ、カエルがかわいそうだよ」とケイタが言うと、シンヤも「そうだよ。いつも命令ばかりしてずるいよ。ヤッちゃん、自分でやったら」と言って別の遊びを始めました。しばらくしてヤスシは担任に「やっぱり飼うの、

やめた」と言いに来ました。担任が「そうね、その方がいいと思うけど、どうしてそう決めたの?」と尋ねると、「ケイくんとシンちゃんが手伝ってくれない。いつも命令ばかりしてるから、自分でやれって」と少し寂しそうです。「ケイくんたち、どうして命令ばかりしてるって思ったのかしらね。優しくお願いしたの?」と尋ねると、ちょっと下を向いて「わかんない」と答えます。「先生、聞こえたんだけど、やっぱり優しくなかったかな? 命令に聞こえたかもしれない。でも三人は仲間なんですよ? 仲間は大事にしないとね。離れちゃうとつまらないよ。ちょっと難しいけど仲間の気持ちも考えないと楽しくはできないかもしれないね。仲間として遊びたかったら、ヤスシくんも自分のことばかり言わないで二人の考えも聞かないとね」と言うと、「うん」とうなずいて担任にもたれかかるようにして考えています。担任は黙ってそのままにしていると、「やっぱり、三人で遊びたい。謝ってくる」とぼそっと言いました。「その方がいいね。先生もそう思うよ。自分で気がついたからもう大丈夫ね。よかった!」と言うと、ヤスシは大きな声で二人の名前を言いながら駆けていきました。

5歳児ぞう組の男女数人の幼児がドッジボールをしようとして集まっていますが、なかなかチーム分けができません。アキオがどうしてもコウジを自分のチームに入りたいと主張しているからです。確かにコウジはボールを当てる確率が高いので勝つことが多いのですが、このままでは始まらないので、担任は他の子の考えも聞くことにしました。中にはアキオと同じ考えの子もいましたが、相手チームには「コウジくん、あっちのチームでいいよね。いなくてもがんばろう」「うん、みんなががんばればいい」「チーちゃん、逃げるのうまいから大丈夫」「みんながボールよく見て当たらないようにすればいいんだよ」など、かえって結束を固めているようです。コウジには気の毒な展開になってしまいましたが、アキオの思いが通ってプレーボールになりました。はじめのうちはアキオの赤チームが優勢でしたが、白チームもなかなか負けてはいません。外野にいる子が内野の子に声援をし、内野の子も外野の子にボールをパスして渡すなど連携プレーを始めました。投げる力の弱い子がボールを取ると同じチームの子に素早くパスするのです。後半になると

白チームが盛り返し、大接戦のいいゲームになりました。結果は赤チームがわずかな差で勝ったのですが、勝った赤チームよりも白チームの方が「チーちゃん、やっぱり最後まで当てられなかったね」とか「シュンスケくんも投げるの、強かった」など盛り上がっていました。

自分たちで始めたゲームだったので担任はあまり介入したくないと思っていましたが、よいチャンスなので、勝ち負けだけが大事なのではなく一人ひとりがどれだけ自分の力を発揮するか、どれだけ努力するかが大切であることや、今日のようにシーソーゲームのように競り合う方がおもしろいこと、そのためには仲間が結束して力を出し合うことや一人ひとりが大事な存在であること、そしてゲームの醍醐味を味わうには競う相手がいることを話し、クラスの仲間としての育ちを喜びとともに伝えました。その後はチーム分けでのトラブルがなくなったことはいうまでもありませんし、その日のそのゲームだけの仲間でも、チームの一員として、同じめあてに向かう仲間として気持ちを一つにして活動できるようになっていきました。

* 指導及び援助のポイント

仲間関係はまず友達関係が成立していることが基盤ですし、一人ひとりの成長・発達とともにその結束は高まっていきます。

3歳児では、自分の遊びを邪魔されたり思うことが思うようにできなかつたりして、自分以外の子どもの存在を邪魔に思うこともあります。次第に周囲が見えるようになると、他の子がしていることに興味をもったり同じようにしたいと思ったりするようになります。このころになると誰かにそばにいてほしくなり、誰かがいるところで自分のやりたいことをしています。自分のまわりにはいるのは誰でもよく、遊びはいわゆる一人遊びです。次第に、偶然だったり保育者に促されたりしてかわりかもてるようになり、言葉を言うようになりますが、まだ一方的に伝えているだけです。このころの指導のポイントとして大切なのは、邪魔な存在からよい存在、興味をもってかかわると応じてくれる楽しい存在であることを、体験を通して感じられるようにしていくことです。

子どもは園で覚えた名前を盛んに家庭で言うようになります。このとき「お友達になったの？」などと聞くと、「うん、友達」とは言いますが、そもそも「友達」なるものの理解ができていませんから、毎日、違う子の名前を言います。その都度、親はたくさん友達ができたこと喜んであげますが、その心配はまったくないのです。覚えたことを得意げに言っているの、一緒に感心していればいいので

す。友達作りを急がない方がよいでしょう。

4歳児になると、自分の意図や考えをもちますが、それを相手にわかるように伝えられないし、相手も受け入れないどころかわかろうともしませんから、しばしば行き違いが生じ、トラブルを起こします。このようなトラブルやいざこざの体験の中で自分とは違う気持ちや考え、意図などがあることに気づき、相手を知ったり自分自身の認識をしたりもします（「いざこざ」P54～55参照）。

4歳児では自分の思いが相手に伝わったうれしさと、相手を受け入れることが自分にとってよいことに気づくようにすることでしょう。また自分が困っているときに助けてくれた友達の存在を実感できるようにすることも重要なポイントです。そして、単純な気持ちでも「仲間ね！」という（この「ね！」が大事なのですが）思いが互いにもてるようにしていきたいと思えます。

5歳児になると、思い通りにする相手に反発を感じたり不満を感じたりし、それを相手に伝えられるようになります。そのことでのいざこざも起こりますが、思い通りにしようとする側も半分はよくないと思っていますし、相手側も許容する気持ちが育ってきていますから、その辺を理解して指導するとよいでしょう。ゆっくりかかると、保育者や大人が考える以上にしっかりとした考えをもち、解決策を考えられます。また、仲間という思いから相手のことも考えた折衷案やアイデアを出すこともあるので、解決を急ぎすぎないことが大切です。仲間の中で個々が大事にされ、他の人を大事にしなが自分たちのめあてに向けて力を合わせ、取り組みややり遂げた充実感を仲間と共に共感し、それぞれの貢献を認め合えるように援助していくことが大切でしょう。

知得

仲間（友達）は一生の宝物。さまざまな人との出会いの中で、自分で心を寄せる相手を探すのが何よりです。子どもが成長するためには子どもが心を寄せ、しかもあこがれを抱く存在が必要でしょう。あこがれや適度なライバル意識は相互成長につながります。

恥の意識

成長発達にとっての意味

「恥ずかしい」という言葉は、周囲の大人が使うので比較的早い時期から聞き慣れてはいますが、実際に自分の行動とのかかわりで理解するのはかなりあとになります。しかし、わからないながらもパンツをなかなかはずさないときに「恥ずかしいから早くはこうね」などと言われると、「そうか、恥ずかしいんだ…」というように感じます。保護者や大人が場面に応じて言うことによって、どういうことが恥ずかしいのかということ認識していきます。したがって、どのような状況のとき、どのような人にどのように言われてきたかによって、意識の持ち方や強さは違ってきます。また性差によっても異なりますので、個人差は当然ながら大きいと言えます。

3歳ごろに自我が芽生えてくると、「恥ずかしいよ」と言われるとそれはいやだという気持ちを表します。「恥ずかしい」と言われることは自分にとっていいことではないと理解ができるようになります。特に

「赤ちゃんみたいで恥ずかしいね」とか「大きくなったのにいつまでもぐずぐずしていると恥ずかしいよ」などと言われると、「恥ずかしくない」と反論しながらも自分からしていることをやめたり、しなければならないことをやったりしています。4,5歳児になると、「ぐずぐずしているのは恥ずかしい」と自分で考え、自らふんぎりをつけられることも多くなります。また5歳児になるとプライドを傷つけられることに敏感になり、人に知られたくないことや見られたくないことを隠そうとします。女児で「恥ずかしい」という意識の強い子の場合、健康診断やプールの着替えなどのとき、人に見られないように隠したり隠れたりすることもあります。また、恥ずかしいときにその気持ちを押しさえようとして、必要以上に強く出たり自分なりの考えを押し通したり、「おどけ」や「ひやかし」という行動で表したりすることもあります（「おどけ」P58、「ひやかし」P100～101参照）。

子どもの姿 ①

「だって恥ずかしいんだもん」（5歳児）

リョウスケは、尿意は感じていましたが遊びに夢中で、いよいよになってトイレまでとんでいきましたが、間に合いませんでした。担任が気づいてぬれたところを処理し、リョウスケに着替えるように言いますが、モジモジしてなかなか着替えようとしません。小さい声で「ここじゃいやなの」と言うので職員室の奥に連れていき、「一人で大丈夫ね」と言うので「うん」と安心したように答えていました。4歳くらいまではみんなの前でも平気で着替えていたのですが、やはり恥ずかしさが意識されるようになってきたようです。担任が保育室に戻ると、

一緒に遊んでいたトオルが「先生、リョウスケくん知らない？」と言うので「先生がお願いしたことをしてくれているの。すぐ来るから待っていてあげてね」と答えると、「わかった」と言って戻っていきました。リョウスケには「みんなが心配していたから、先生の用事してもらってるって言うてあるよ」と言うと、「うん」とほっとした様子です。リョウスケと二人で笑いながらVサインをし、リョウスケは何もなかったように遊びに戻りました。

子どもの姿 ②

「オレの場合はこれでいいんだ！」（5歳児）

トモキは当番に当たったので、グループの友達とうさぎの世話をしています。世話の手順や方法は決まっています。ところが、トモキはトレーをふかずに新聞紙を敷いてしまいました。雑きんを持ってきてふこうとした夕

ケルに、「違うよ、ふいてからだよ」と言われてしまいました。トモキは一瞬、はっとしたようですが、すかさず「オレの場合はこれでいいんだ」と強く主張し、夕ケルの言い分を阻止してしまいました。ちょうどそこに来

合わせた担任は、夕ケルの不満そうな、それでいてどうしてよいかわからないという表情に気づいて「何か困っているの？」と尋ねると、トモキもやり場のない感じています。二人と同じグループの子たちから事情を聞き、「間違いは誰にでもあるし、先生も間違えたことあるよ。間違えたことは恥ずかしくないけど、そのままにしておくのはどうかな？」と言い、どうしたらよいかを一緒に

考えました。するとトモキが「ごめん、ぼくが間違えたの。もう一度やり直す」と言い、他の子もうなずいています。担任は「そうだね。先生もその方がいいと思うよ。もう一度洗わなくてもふくだけだから」と言うと、二人は新聞紙をはがして雑きんでふき始めました。他の子はそれぞれ自分の持ち場に戻っていきました。

*指導及び援助のポイント

人は誰でも恥ずかしいと思う場面に、何回も出会っているのではないのでしょうか。そういうときは年齢を問わず、そっとしておいてほしいと思いませんか？子どもも同じだと思います。子どもにも子どもなりのプライドがありますので、原則としてそっとしておくことが大事です。恥ずかしさを実感すれば同じことは繰り返さないように努力するだろうと思います。

しかし、恥ずかしいと思う気持ちの表し方はさまざまです。相手のせいにして開き直ったり、強く主張して自分なりの道理を押し通そうとしたり、知らん顔したりなど、必ずしも好ましいとは言えない行動にでる場合も少なくはありません。そのような場合、大人はその行動の裏側にある気持ちを理解することができますが、子どもには不可能で

す。表されたことだけで考えますので、その行動をそのままにしておくことは、場合によってはきちんとしようとしている子の気持ちをなえさせたり不満を感じさせたり、ひいては恥ずかしくてもごまかしていいのだという気持ちを抱かせたりしかねません。

子どもたちの気持ちを傷つけないように十分配慮しながら、必要な調整をしなければならないことがあります。その基盤は大人と子どもの信頼関係です。十分な信頼関係があれば自信をもって毅然と対することが、その子も周囲の子も育てることになります。

謙虚に「恥ずかしさ」を感じながら、その場に応じて自分の力で乗り越えて、自分らしく輝いてほしいものです。



知得

「ほどほどの恥じらい」には微笑ましさを感じます。「恥ずかしい」は育ちの大切な一つの側面です。大事にしたいものです。

はにかみ

成長発達にとっての意味

「はにかみ」は恥ずかしそうな表情や動きをすることを言いますが、その子の心のありさまを写した行動と言えます。似ている状況として「引っ込み思案」や「内気」がありますし、乳児期の「人見知り」もはにかみの一つの表れと考えられなくもありません。

人と接する場で、あるいは人前で何かをする場や状況で、周囲の者から見るとある種の抵抗や恥ずかしさで、思うように自分を表せないのではないかと感じられる子がいます。この背景には劣等感とはいかないまでも、ある種の自信のなさ、人とのかかわりや自発的な取り組みの経験不足など、安心して自分を出せない背景があることも考えられます。一方、

「恥ずかしがり」という性格的なものもありますが、自分がどう人間かという自己評価ができてきている場合もあります。自己評価は過大に評価する人は積極的な行動が多く、過小評価する人はどちらかという消極的である傾向があるのではないかと考えられます。はにかみは、ある子にとっては発達のあかしと言えます。はにかんでもじもじしている様子はほほえましいものがありますが、度が過ぎると集団での活動の場では周囲をいらさせたり活動を滞らせたりすることがありますから、励ましや賞賛なども含めて適時適切な援助をしながら本人にとっても周囲にとってもよい状況にしていくことが大切です。

子どもの姿 ①

「いい、一人でできる」(5歳児)

2学期が始まりました。年長組では夏休み中のことをみんなの前で話したい希望が多く、話したい子から話ができるように、毎日少しずつ時間を設定しました。5日目になるとほとんどの子が終わり、話していない子が2、3人になりました。担任は全員にしてほしい願いはもっていましたが、無理はしないことにして特に催促もしませんでした。もう今日で終わりでいいかなと思った日、モエが下の方でこっそり手を挙げました。「モエちゃん、今日お話しするのね。どうぞ」と担任が言うと、前に出て来ましたが、担任の体に寄りかかるようにして立って

もじもじしています。なかなか話し始めないので他の子がざわざわし始めました。担任が「モエちゃん、絵日記に書いた海のお話楽しかったね。あれ、みんなにお話したらどうかと思うんだけど。先生、一緒にしてあげようか？」と聞くと「いい、一人でできる」と小さい声で言い、大きく深呼吸すると話し始めました。しかも起承転結をきちんと考え、わかりやすい話で絶大な拍手を浴び、ほっとするとともにうれしそうでした。このことがきっかけで、はにかむことが少なくなってきました。

子どもの姿 ②

「あたしもほしいの」(4歳児)

4歳児のはな組では、やりたい子が集まって七夕の飾りを作っています。ヤヨイはその様子を見たり、担任がかかっているそばに行ったりしています。担任が振り向いて見ると恥ずかしげに下を向いて離れて行きますが、またすぐに寄ってきます。担任が子どもたちに両面折り紙を見せながら「裏も表も色がついている折り紙があるんだけど、使いたい人にあげますから取りに来てください。これは大事に使ってほしいの」と言うと、数人がもらいに行きます。後からヤヨイもついていきますが、何も言わずにもじもじしています。他の子は「赤と青をく

ださい」とか、「ピンクと黄色のがいい」などと言いながら自分の好みの色紙をもらっていきます。担任はヤヨイもほしいのはわかっていますが、自分から言ってほしくて黙っています。ヤヨイだけになったとき、「もう、ほしい人はいませんか？この折り紙屋さん、今日はこれでお休みにしますけど」と担任が言うと、「あたしもほしいの」と小さい声でやっとヤヨイが言いました。「ヤヨイちゃんもほしかったのね。よかった、間に合って。何色と何色がいい？何ができるのか楽しみ」と言いながら、ヤヨイの希望の折り紙を渡しました。

* 指導及び援助のポイント

はにかみは、初めてのことにしりごみしたり集団への参加に抵抗を示したりなど、個々の気質にかかわっていると考えられます。

はにかんでいてなかなか行動に移せない子も自分の考えや意図、欲求や願望などはしっかりともっています。きっかけをつかみ、自分でふんぎりがつけられれば、難なく達成感ももてるのですが、そこまで時間がかかるのです。したがって、活動への参加を急がせるのではなく、その子のペースでできるようゆとりが大切です。また、一方ではふんぎりがつけられるきっかけをタイミングよく出すことが大きなポイントであると考えます。

大切なのは、一つの方法で対応するのではなく、

一人ひとりの気持ちやその動きをまず受け入れて、その状況に応じた工夫をすることです。ときには子ども自身が「はっとして思わず動いてしまう」ということもあっていいかもしれません。いずれにしても、“させられる”“させられた”ということではなく、“した！”“できた”を実感することです。この体験がはにかみを和らげていく支えになると考えます。

知っ得

はにかんでいる姿、かわいいですよ。どのようによく変身していくのか、楽しみの一つに！もしかししたら保護者の気質を受け継いでいるのかもしれないよ。子どものころを振り返ってみるのも…。



ひやかし

成長発達にとっての意味

茶化したり、はやしたてたりする「ひやかし」は、子どもが感情のはげ口として、また緊張感をほぐすための行動として、笑いに代えて表したりします。またある子どもにとっては気持ちを調整したり、立て直したりするために必要な行動になります。前後の状況と関係なく、脈絡もなく表すことがありますが、その場の状況をキャッチしてタイミングよく、その場にマッチした内容を発言することもあります。

それだけにユーモアにあふれたときには空気も和みますが、場合によっては、相手を傷つけることもあります。成長の表れの一つとも考えられますが、内容によっては子ども自身が気づくように大人が整理することも必要になります。このような場面は、「言っていること、いけないこと」「していること、いけないこと」を伝えるよい機会にもなります。

子どもの姿 ①

「マユミちゃん、ごめんなさい」(5歳児)

クラスの友達が集まって、グループでの遊びの相談が始まりました。それぞれ自分の考えを次々と出しています。タカシは相談の輪にのりきれなかったのでしょうか。近くにいた友達にヒソヒソ話を始めました。「マユミちゃん、ゴリラだよ」と顔を見合わせて笑っています。「ゴリラ」の声に反応して、他の子どもも笑いました。マユミは、困った顔をしています。その様子に気づいた担任は、タカシに「そんなことを言われたマユミちゃんはい

いやな気持ちがるよ。先生もいやだな。」と言われた人の気持ちに気づくように言葉に表し、やめるように促しました。

タカシは担任に言われ、はっと気づいた様子で顔を赤らめながら、マユミに「マユミちゃん、ごめんなさい」と小さい声で謝りました。マユミも「いいよ」と言い、相談が再開しました。タカシも輪に入り、小さい声ながらも自分の考えを言い始めました。



* 指導及び援助のポイント

ふざけて言ったことで誰かがいやな思いをした場合には「どうして？」とか「なんでそんなことしたの？」などと問いたす前に、自分が言われたらどんな気持ちがるのかを毅然とした態度で明確に伝えることが大切です。このほかにも、友達のうちうっかりした発言の揚げ足をとって、「○○だって！」と一人がはやしたてたことがクラス全体に広がり、相手をばかにした笑いが起こることもあります。これは幼児同士の人間関係がうまく築けていなかったり、担任と幼児との関係がときとして微妙にずれていたりすることが原因の場合もあります。

園生活全体の中で、自分がいて他の人がいるというそれぞれの存在の必要性を感じられるようにし、それぞれがいるよさが実感できるようにしたいものです。

このことは家庭や他の場においても同じことが言えます。また、担任(大人)に対しても揚げ足をとることがあります。そのときは、「私はいやな気持ちがる。やめてほしい」と、いやなことはいやだと子どもたちにも相手にはっきり言ってよいことを示すことが必要です。そして担任(大人)ももう一度、その子との信頼関係を見直してみる大切です。

知得

悪ふざけや揚げ足とりは、自分をしっかり見てほしいというメッセージ。そして成長の一つのあかし。質の高いユーモアは、場をなごませます。ふざけから脱却してユーモアのセンスが育つといいですね。

指しゃぶり

成長発達にとっての意味

新生児期から子どもは不快な状況におかれると泣いてその気持ちを表現し、不快を取り除いてもらうことで安心感を得ます。しかし、必ずしもそうはいかないことも起こります。そうすると、子どもは自分でこの不快な気持ちをなだめようとします。その手っ取り早い方法が「指しゃぶり」と言えるかもしれません。

指しゃぶりは、お乳を飲んだときの満ち足りた満足感や安心感、口の中に食べ物などを含んだときの充足感など快の体験に根ざしているようにも思われます。また、乳児期は身近にあるものを何でも口に入れながら認識を広げていきますから、指も偶然口

に入れ、その感触のよさを体感したのかもしれませんが。

保育所や幼稚園などで指しゃぶりをしている子を見ると、多くは退屈で所在なげなときや思い通りならずにつまらなかつたり寂しさを感じたりしたときのように思われます。中には習慣的という状態も見られますが、いずれにしても無意識のうちになされていることが多いようです。また寝るときという子もいますが、自分をなだめようとしたり気持ちを立て直そうと試みたりすることはとても大切なことです。指しゃぶりではなく、感情のコントロールができるものが見つかるといいですね。

子どもの姿 ①

「みんなに見られると恥ずかしいから…」 (4歳児)

ススムは間もなく5歳になるのですが、まだ寝るときに指をしゃぶらないと寝つけません。右手の親指を吸いながら寝つくのが決まりのようになっています。

ススムは3歳くらいまでは何となく手持ちぶさたのときや緊張したときに、指を口に入れることが多かったようです。大きくなるにつれて少しずつ口に入れることは少なくなってきましたが、手が汚れているときでも口に入れようとするので、お母さんはつい「汚いからやめなさい」と叱ったり禁止したりしてしまいがちでした。また、寝るときに指しゃぶりもそろそろやめてほしいと思っていました。そのような状況で迎えた7月のこと、

夏の親子キャンプにススム親子も参加することになりました。

ところが、お母さんは指しゃぶりのことが気になってしかたがありません。そこでその日の夜、寝るときに「キャンプのとき、指しゃぶりしているのをみんなに見られると恥ずかしいから、しないで寝た方がいいんじゃない？」と言ってみました。すると妙に納得した様子のお母さんは、なんとその日は指しゃぶりせずに寝つくことができたのです。

そのことがきっかけで、すっかり指しゃぶりを卒業できたのでした。



*指導及び援助のポイント

見た目もあまりよいとは言えず、不潔でもある指しゃぶりを大人はやめさせようと躍起になりがちですが、無理にやめさせようとするのは、逆効果になることがあります。

おねしょも同様な場合が多いのですが、3歳を過ぎると「恥ずかしい」ということが何となくわかるようになり、「指しゃぶりは恥ずかしい」という気持ちになってきつつあるのですが、つい手が口に入ってしまうのです。そのような気持ちでいるときに「やめなさい」と強く禁止されるとやめられないだけでなく、ストレスをためることになり重症化することもあります。

大人がタバコなどのしこう品をなかなかやめられないように、子どもにとっても指しゃぶりは気持ちが落ち着くのでなかなかやめられないようです。また、指しゃぶりだけでなくタオルをかんだりつめをかんだりするなどさまざまな状況も見られます。いずれにしても、ただ禁止をしているだけでは効果がありません。

まずはわが子がどういうとき、どのように、どのくらいするのかその状況を知ることが大切です。次に「恥ずかしい」という気持ちの育ちが見られるかです。3歳児に「赤ちゃんみたい」と言うと、「赤ちゃんじゃないもん！」と憤慨します。こうなってくると「大きくなったんだ」ということを

伝え、自信をもてるようにしていきます。自信をもてるように励ましていくと、あっさりやめる場合があります。

また、指しゃぶりをしなくてもすむような環境づくりも必要でしょう。退屈したり手持ちぶさたの状況の切り替えにも配慮が必要かもしれません。次第に子ども自身が自分の力でよい方向に向けていくことが大切でしょう。なかなか寝つけないときには、昼に体を動かして思いきり遊んだり、寝るときに静かな音楽をかけたりするなどの工夫をしてみてください。

知得

「なくて七癖、あつて八癖」などと昔から言われているように、誰にでも癖はあるものです。指しゃぶりも癖と考えてみてはどうでしょうか。癖というのは無意識のうちにしてしまうものです。自分がその癖をどう思うか意識することで、なくすことができるのが癖ではないでしょうか。周囲の人に不快感を与えない程度の癖はその人らしさかも知れません。

成長発達にとっての意味

思わず周囲の笑いを誘う「ユーモア」は自分と相手、また周囲の人々を楽しく心地よいものにするばかりでなく、その関係を広めたり深めたり、温かい関係を構築していくうえでの大切な要素の一つです。楽しいユーモアでともに笑い、ともに語ることで、心がつながり豊かになります。またユーモアは緊張を和らげる働きをもちます。ユーモアと類似する言葉に「しゃれ」や「ウィット」がありますが、多少意味が異なります。「しゃれ」はどちらかという気がきいていることをさしますし、ユーモアが他人を傷つけない寛大さがあるのに対し、「ウィット」はときには攻撃的になる場合があると言われます。両者ともユーモアとはニュアンスが異なりますので、幼児期のユーモアを考える場合は「ブラックユーモア」も合わせて除外したいと思います。

ユーモアを解するには知的な面と情動的な面、表現力や理解力などの発達が大きくかかわります。5歳未満の子どもたちにはユーモアを解することは困難ですが、5歳児になると個人差はあるもののわかる子が増えてきます。笑いを誘うような言葉や動きを意識してするようになり、クラスの雰囲気も違ってきます。そのタイミングや表現の内容、他の幼児の反応から子どもたちの成長発達が感じられます。ユーモアが多く見られるようになったということは、周囲の状況や話の内容を理解する力、自分の考えや経験を豊かに表現する力が育ってきたことのあかしとも言えます。

子どもの姿 ①

「大変失礼いたしました」(5歳児)

トシヤとタクの二人はパネルシアターをしようと、ボードを出し、椅子を並べ、音楽をかけました。他の子どもたちも見に来て、用意が整ったように二人は思ったのでしょうか。ところが、いざ始めようとしたとき、パネルが出す順番になっていないことに気づきました。タクはあわてて、出す順番に整え始めましたが、その様子を見たトシヤは、慌てることなく、舞台の前に出てきました。どうするのかな、いよいよになったら保育者の出番かなと思いながら見ていると、トシヤはもみ手をしながら腰をかかめ「大変失礼いたしました。ちょっとお待ちください。今準備をしていますから」と何回ももみ

手をしながら頭を下げ、ユーモラスに動き回りました。ときどきタクの方を見ながら「どうですか、もう少しですか。そうですか。もう少しですって。もうちょっとお待ちください」と言い、右に左に動いています。その様子がおかしいので、集まった子は大笑いをし、その声につられて他の遊びをしていた子ものぞきにきます。準備ができるまでに大いに盛り上がりました。

準備ができると二人はまじめな顔で話を始めました。終わると二人で前に立ち「これで終わりです。ありがとうございました」と腰をかかめておじぎをし、拍手喝さいを受けていました。



* 指導及び援助のポイント

この事例のようにうまくいった場面ではつい、当人たちだけに視点をおいた解説や講評をしてしまいがちですが、無用なことです。このような場合、保育者も他の子どもたちとともに観客の一人として大いに楽しみましょう。保育者は楽しみながら周囲にいる子どもたちに自分自身の感想や思いを伝えることも、当人たちへの認めだけでなく大切です。例えば「あんな風に言ってくれるといいよね。楽しく待てるね。みんなが退屈しないように考えてくれているのね」などと伝え、自分たちもそのような場になったときには工夫が必要だという意識を高めたいものです。その場では当人たちは大きな拍手で大満足なのです。しかし、大人はその場で何か言わないといけないと思ひ、絶大な賞賛をし、観客の子どもたちにも同意を求め、他の子どもたちはそれに応じるとい状況が多くあるように思います。一見すると「よい指導者」と見られがちですが、「その行動を受け入れた観客の存在」、その育ちの承認が抜けてしまうことはな

いでしょうか。

当人たちにはその場ではなく別の場でじっくりと、「ここが工夫されてよかった」「みんながどこそこがおもしろいと言っていたよ」などと、保育者の伝えたいことを自分の言葉で伝えたり他の子の感想として伝えたりして、子ども自身が育ちを実感したり、次へのめあてや意欲をもったりできるようにすることも大切ではないでしょうか。

知得

ユーモアにはその人の人柄やセンスがにじみ出ています。ユーモアは周囲を和やかにします。楽しく心温まるユーモアはさらに心地よいユーモアを生みます。ユーモアのセンスは生活の中ではぐくまれます。楽しく和やかなクラスの雰囲気、また家庭の会話や雰囲気は、子どもの心をはぐくみユーモアの糧になるでしょう。

欲求不満

成長発達にとっての意味

人は欲求が充足されると安定し、気持ちにもゆとりがもてますが、充足されないと不満を感じ、それが高じるとストレスとなり、ときには心情面に多大な影響を及ぼします。欲求には食事、排せつ、睡眠など人として生活していくうえで欠くことのできないものと、人それぞれの思いから発するものが考えられます。不満の感じ方は欲求の強さに関係があると思われませんが、その度合いには個人差があり、その表し方もさまざまです。幼児は自分の気持ちを動きや言葉で表しますが、相手が大人の場合はともかく、子ども同士の場合には伝わらないことも多々あります。伝わらないと泣く、怒る、かみつく、ものを投げる、駄々をこねるなど、まわりに不満をぶつける行動をとることがあります。

欲求不満は個人の欲求が何らかの妨害により満足を得られなかったことからもたらされる不快感、不満感など心理的・情緒的緊張が高まった状態であると言えます。しかしながら、欲求の全てが充足されればよ

いかというと、それだけでは子どもの成長発達は望めません。周囲の人の受け方による葛藤の体験や適度な欲求不満の体験は、いつどのようなことならよいかという自分の欲求の出し方や状況判断の学習の場にもなります。しかし、規制の強い生活では、子どもが気を遣いすぎたり自分が受け入れられていないと感じたりすることから、自分を出せないこともあり、それがいろいろな面に表れることもあります。5歳児くらいになると、自分で判断したり、出し方を工夫したりなど、相手のことを考慮するような様子も見られるようになります。

そうは言いながらも欲求不満は精神的によい状態とは言えませんので、個々の状況に応じて、大人が知恵を働かせておさめていくことが必要になります。年齢によっては代替えのものなどでなだめなければならぬこともあります。次第にきちんと言い聞かせ、自分で納得して気持ちをおさめられるようにしていきたいものです。

子どもの姿 ①

「ママ、マナちゃんって言ってくれないとやだ！」 (3歳児)

3歳児のマナは10月に赤ちゃんが生まれると知って楽しみにしていましたが、生まれ月が近づき母親がマナの思う通りに動けなくなると、次第に否定的な言葉や行動が多くなりました。ある日、ままごと遊びで赤ちゃんになりきって遊んでいたマナのところにアイコが来て「アイコも赤ちゃん」と同じように寝ようすると、「だめ！わたしだけ！」と押しのけました。アイコが泣き出すと「もういい！やめた」と言ってその場を離れました。しばらくして担任が「お弁当だから片付けよう」と言うので、「お弁当食べない！」「片付けできない」と堅い表情で言うので動こうとしません。担任が「先生もマナちゃんと一緒に片付けしよう。ハイこれ」と言って人形を渡す

と表情が和らぎ、片付け始めました。「マナちゃんがんばったからこんなにお部屋がきれいになったね」と言うとうれしそうにならずにいました。ところが、帰る時間に母親が迎えに来て担任や他の保護者と話していると、「わたしのこと見てる？見てて！」と何回も言ったり「ママ、マナちゃんって言ってくれないとやだ〜」と言ったりして、なかなか靴を履き替えようとしません。とうとう「履かせて〜」と駄々をこねます。担任が「マナちゃん、自分でできるよね。もうすぐお姉さんだし、ママはお腹苦しいのよ」と言うので「お姉さんじゃない。マナ、赤ちゃん。ママ苦しくない」と言い、結局母親に履かせてもらっていました。

子どもの姿 ②

「みんなきらいだ！」 (4歳児)

コウは電車で遊ぶのが大好きで、毎日のように遊んでいます。段ボールにキャストをつけて動かせるように

作り、大満足です。その日も登園するとすぐに廊下を走り出しました。ところが、他の子が廊下で遊んでいて思

うように走れなかったり、他の組の邪魔になるので静かに走るように保育者に制限されたりします。はじめは注意深く行動していましたが、やはり思うように遊べないので腹が立ってきたのでしょう。突然大きな声で「みんな

嫌いだ！」と言い、他の子が遊んでいる場に電車をぶつけて場を壊したり電車を振り回したりし始めました。保育者に止められると、その後なだめられてもなかなか気持ちがおさまらないようでした。

*指導及び援助のポイント

自分の欲求をはっきりと表す子や欲求不満を動きや言葉で表す子への対応は、その子の反応を見ながらいろいろ試みてみればよいのですが、なかなか表さないというよりは読みとりにくい子への対応には難しいものがあります。

幼児の欲求不満の気持ちはさまざまな形で表れます。保育者や大人はまず、子どもの気持ちを受け止め、その言動の背景にある欲求を見極めることが大切です。欲求不満解消への対応は年齢や一人ひとりのおかれている状況などによって異なりますので、これがよいというものはありませんが、なんととっても愛情を込め、心を尽くして当たることが何よりでしょう。そのうえで、その欲求が当然か不当なものであるのかを見極めることが必要です。

そして当然の欲求であれば、その実現に向けて最大限の努力をし、満足を得られるようにしていくことです。反対にわがままだったりその場の状況としては実現不可能であったりなど、その欲求がふさわしくないものだった場合には、本人が納得して欲求をがまんする、あるいは妥協案を考えられるよう誠意のある方向づけが必要です。

「思い通りになる体験と思い通りにならない体験」を通して、欲求してよいか悪いかなどの質、欲求の表し方、そのタイミングを学んでいきます。またこの両方の体験は、望ましい成長発達を促すうえでも必要なことです。欲求はないよりあった方がよいし、出さないより出した方が成長していく場が広がります。要は相手や周囲の人の対応が大切ということになります。



知って

欲求の充足は安定の基盤であると同時に、わがままを増長させるといふ両面があります。ポイントは欲求の交通整理とその対応です。

ルールや決まりの理解

成長発達にとっての意味

他の人と心地よく生活するためには、ルールや決まりが（マナーと言ってもいいかもしれませんが）必要です。家庭にもその家ならではの「決めごと」があるはず。しかし、家庭での約束ごとはどちらかという、保護者の情によってゆるめられたりそのときの状況で変更可能だったりすることがあり（厳しい家庭もなくはありませんが）、多くは優しさもあります。

決まりを守ることに初めて出会うのは家庭です。例えば「食事中は立ち歩かない」とか「ゲームは30分以内」といった取り決めで、守らないとお叱りは受けるものの、守らなくてもそれほど決定的なものではなく、繰り返してしまう程度のもので、しかしながら、大切なのは「決まり」というものが存在することの理解を家庭で体験していることです。

子どもは、はじめは言われた通りにすると「よく守れたね」とほめられるので、おだてにのって「約束」を意識せずに行動し、結果として守ったという経験をたくさんします。しかし3歳ごろになると自我が芽生え、自分なりの理屈もつようになり、言われた通りにしないことも多くなります。

幼児期になると、友達と楽しく遊んだり遊びをおもしろくしたりするためには、ルールが必要であることがわかってきますが、自分の欲求の強さや自分

の利益が優先して、守れないことも多くあります。

このようなときには、気持ちを理解してもその行為（ずるをする）は許せませんので、毅然として正すことが必要になります。特に4歳児後半から5歳児になると、因果関係がわかり予想できることも多くなりますから、さまざまな理屈をつけて自分の思いを通すこともあります。ときには、間違っただけであっても「へえ！」と感じてしまうことさえあります。

ルールは「規則」であり、決まりは「決められていること」で同じようなことではありますが、一般的にはルールはスポーツや遊びにかかわっている傾向があるようです。しかし集団生活では、生活を営むうえでのルール（集まったら静かに話を聞く、人がいやがることはしない、人のものは取らないなど）と遊びを楽しくするルール（鬼遊びではつかまったら交替するなど）があります。

5歳児になるとルールを理解して守ろうとする態度や守らない友達を注意する行動が見られます。そのためトラブルも起こりますが、友達との意見の食い違いを通して、ルールを確認したり新しいルールを生み出したりして、ルールを守る意識が高まります。このようにルールを作ったり守ったりする必要性を感じて生活するようになるためには、友達と楽しく遊びを続けたいという気持ちが前提になります。

子どもの姿 ①

「強い子ばかりでするいよ」（5歳児）

2学期になると集団で遊ぶ楽しさが増してきます。昨年度の年長児がやっていたドッジボールをしたいという子どもたちの希望を担任は実現したいと思いました。まずは場所を確保し、あとは子どもたちがどのようにするのかを見てみると、ルールを決めずに遊び始めました。

すぐに、ボールが当たったらどうするかということになりましたが、コウスケから「当たったら相手のチームに行くのはどう？」という提案があると「いいよ」と簡単に決まりました。

順調にゲームが進んでいきましたが、アキが当たったのに相手チームに行くのはいやだと言いはじめました。するとタダシが「アキちゃん、当たったのにずるいよ」と

言うと、アキは「だって、コウスケくんたちのほうが多くなってずるいよ」と言い返します。相手チームに行く人数に偏りができたりすぐに終わってしまったりすることに気づいていた子も何人かいて、どうしたらよいか相談が始まりました。

2チームで遊ぶためには人数が同じでなければだめということになり、はじめに人数を合わせることに当たったら外に出ることを決めました。

数日たったある日、モモコたちが「強い子ばかりでするいよ」と言い始めました。コウスケがボールを投げるのがうまい子を自分のチームに集めていたのです。「私たち、女の子ばかりだもん。すぐに負けちゃう」と言う

のです。それを見ていた担任は「どうしたらいい？」と子どもたちの考えを聞き出します。マズミが「コウスケくんがこっちのチームに来ればいい」と言うと、コウスケは「いいよ。ほく、そっちのチームに行っても」とあっさりと言います。「本当にそれでいいの？」と担任が確認すると、「いいよ」と言い、他の子たちも「いいよ」と言うので、とりあえずそれで開始しました。

担任はいずれチーム分けについてもルールを考えてほしいと思っていましたが、数日後、ドッジボールをしたい子は相手を探して二人でジャンケンをし、勝ち負けで入るチームを決めるルールに落ち着きました。

*指導及び援助のポイント

ルールは守られることを前提にした「決めごと」ですが、守っているかどうかだけをチェックしていると、関係がぎくしゃくしてしまうことがあります。特に子ども同士では厳しすぎる指摘になってしまうこともあります。

子どもはルールや決まりは守らなくてはならないことは、頭ではわかっていますが、実際の場面ではなかなか守れないものです。またなぜ守らなければならないのか、守るべき内容は何かといった具体的な事柄の理解は、5歳児でも十分とは言えません。したがって、ルールが守られていない事態に出合ったときには、頭からそのことを責めたり叱ったりせずにその背景をとらえることが大切です。このようなときの大人の対応が、ルールにかかわる子ども同士のトラブル解決のモデルとなります。

子どもたちがルールを守れないときの要因としては、ルールの理解が十分でないことや自分の利益や欲求の強さ、また相手との力関係によることなど、個々によってさまざまに考えられます。

主体的にルールを守るためには、遊びを通して

ルールがないと困ること、ルールがあると互いによいこと、そして何よりも自分から守ったことの心地よさを実感することが不可欠です。

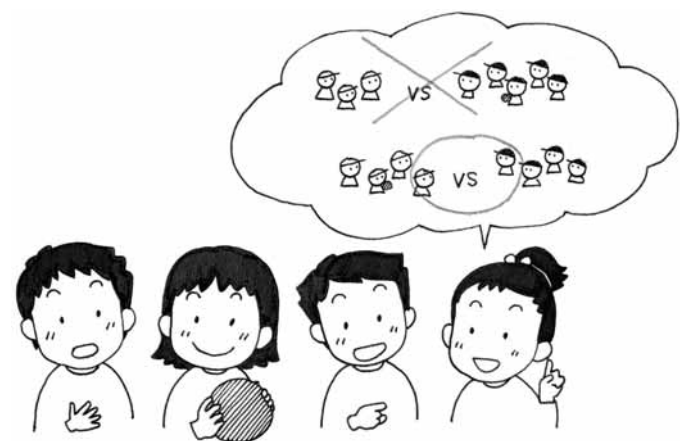
また、具体的な場面で体験を通して体得することも大切です。心と体の両面からルールにのって活動する快感を実感できるような場の設定も必要になるでしょう。

大人にとってはルールが先にありきというのは、社会生活を営むうえで当然であってもかまわないことですが、子どもと対するときにルールを守ることを優先させすぎると、まなざしも厳しいものとなり、子ども自身に判断するゆとりをなくさせてしまいかねません。

5歳児になったら、規定のルールに添うだけでなく、自分たちで相談して遊びの必要に応じてルールを変えたり、新しいルールを作り出して遊びをいっそう楽しくしたりする経験が大切です。この積み重ねが規範意識をはぐくみます。この体験がルールの意味の理解と守ることの必要性の理解に大きな役割を果たします。

知っ得

ルールはともに過ごしたり活動する者同士の共通理解のうえに成り立つものと社会秩序といったものがあります。いずれも言われて守られるのではなく、自分の判断で守るようにしていきたいものです。



劣等感

成長発達にとっての意味

「劣等感」は文字通り、他の人と比べて自分が劣っていると感じることですが、感じる強さや度合いには個人差があります。また、劣等感はその人からの評価も大きく影響します。つまり、ほめられれば自信に、けなされれば劣等感にというように、劣等感と自信は両極にあると言えます。特に身近な大人の承認や賞賛は、子どもの評価の基準となる場合がありますので気をつけたいものです。

1,2歳の子どもが何かを言ったりしたりすると、大人は手をたたいて喜んだりほめたりします。そうすると、子どもは得意になって何回でも繰り返し同じことをします。3歳ごろでも絵を描いたり歌を歌ったりすると、何を描いたかわからなくても歌詞や音程がはっきりしなくてもほめてくれますので得意になっています。ところが4歳ごろになると、保護者をはじめとして周囲の人たち(子ども同士も含めて)はある程度の質を求める傾向が表れます。ほめられるだけでなく何を描いたのか問われたり、その歌はこうでしょうなどと言われたりすることが多くなり、ときには他の幼児から「変なの」と言われることにも出会います。したがって、劣等感

分中心に物事をとらえる傾向のある3歳児では見られることが少ないのですが、4歳、5歳と成長するにしたがって見られるようになります。

他の人や自分の力の評価、それを比較できるということは相当に育ってきたということが言えますが、「自分は絵を描くのが下手だから」と描くことに強い抵抗感を示したり、「サッカーが下手って言われたからもうサッカーには入らない」と、それまで楽しんでいた遊びを急にしなくなったりという状況が起きることがあります。また行動する前に「きっと自分にはできないだろう」と、挑戦するのをためらったりすることもあります。

自分の力量を知ることには大事ではありますが、劣等感につなげてしまうことは好ましいことではありません。また他の人の特性を理解することは大切ですが、相手に劣等感を感じさせる言動は慎まなければなりません。

劣等感が多かれ少なかれ成長の過程で誰でも感じることですが、それをバネにしていつその飛躍も期待できるものです。

子どもの姿 ①

「一生懸命したらいいんだよね」(5歳児)

5歳児のアキラは絵を描くことに抵抗感をもっていません。みんなで一緒に絵を描く活動をする時、友達に見られないように手で隠しながら描き、保育者のところにもってくる際も裏返しにして持ち、保育者の前でそっと表に返します。アキラは発想がすばらしく、丁寧に描いています。保育者はそのことを伝え「先生はアキラくんの絵、好きよ」と言うことにこつとしますが、それがなかなか自信に結びつかずいます。

保育者は「上手」「下手」ということにこだわらず、伸び伸びと表現することを楽しんだり、自信をもって行動してほしいと願っています。そこで常々、「自分が一生懸命描いたり作ったりしたものはみんなすてきなんだよ。お友達と比べるのではなく自分の気持ちをこめて楽しくするのが一番大切なんだよ」と伝えていました。

運動会の2日後のこと、運動会の絵を描きたいという子どもたちの希望で描ける場を用意しました。描きたい

子が集まり、「一生懸命したらいいんだよね。下手とかないんだよね」と言いながら描き始めました。驚いたことにアキラが自分から描き始めました。見るとリレーの場面を描いています。保育者は思わず「アキラくん、リレーかっこよかったもんね。やっぱりリレーの絵だね」と言うと、「うん」と言うにっこりしました。周囲の幼児もそれぞれ「ぼく、応援団したから」とか、「踊り、楽しかったね」と言いながら和気あいの雰囲気です。そのうち、となりで描いていたヨシオが「アキラくんの足、かっこよくて速そう」と言うと、他の子も見て「ほんと!」「手も曲がってる」と感心しています。そのうち「ヨシオくんのも…」「マサくんのも…」と感心したところを見つけ合い始め、アキラも他の子の方に向くようになりました。アキラはこのことをきっかけとして、少しずつ自信をもって行動できるようになってきました。

* 指導及び援助のポイント

劣等感の克服には「自信」が欠かせない要素となります。常に他人を気にしたり比較したりするのではなく、「自分はこうしたい」「これでいい」と自信をもって行動できるように、保護者や保育者など身近にいる大人が援助していくことが大切です。また、劣等感を感じるのは乳児期から家族や周囲の大人の愛情を十分に受け、人を信頼し安定した生活をしてきたかどうかにもかかわってきます。一方、自信過剰は人をさげすんだり馬鹿にしたりなど嫌味な行動につながる場合がありますので、自信がもてるようにしていく援助の際に十分配慮したいところです。

3,4歳児のころは、自分の大好きな人からの承認・賞賛や励ましで気持ちを切り替えたり、発奮してやろうとしたりしますが、5歳児になると友達の存在が大きくなります。いくら保護者や保育者が「いいじゃない」「すてきよ」と言っても、友達や仲間から受け入れられないと満足しなくなります。一方大人が「今少しなんとか…」と思っ



ても、友達同士が了解し合えば大人たちは「よい」ということになります。このころは、大人の助言は控えめにしながらも期待する方向は明確に伝えていくことは必要です。また、劣等感を感じると自分の中に引きこもる消極的な状況と、反対に自分より優れていると感じた相手に嫌味や否定的なことを言う攻撃的な動きをするというような状況の両面が見られることがあります。どちらも不安な気持ちから発するものですので、積極的にしようとか相手がいやなことはやめるようにしようなど、対処療法的な援助をしても効果はあがりません。

一人ひとりのもつ劣等感がどこから発するのかを理解したうえでの援助が必要です。

知得

金子みすゞの詩ではありませんが、「みんなちがってみんないい」なのです。このことを基盤としながらも劣等感を乗り越えられる力を育てていきましょう。劣等感や飛躍のバネにも原動力にもなり得るものです。